

英語において知覚と 情動を表わす語の起源について

永野芳郎

I

§1 音，色，味などのようにわれわれの感覚器官に加えられた刺戟によって生じる経験，すなわち感覚 (sensation) の言語的定着の問題については，私は今まで二，三の論考をまとめたことがあった。⁽¹⁾ そのとき各問題の性質上おのずとふれる機会のないままに残されたものを今ここでとりあげることにはしたいと思う。

まず，感覚とは各器官に応じて視，聴，嗅，味，触，温度の各々に分たれることはいうまでもないこととして，刺戟がわれわれの意識に作用するがままの単純且つ直接的なものである。これに反して，知覚 (perception) は感覚器官を通じて外界の対象の性質，形態，関係などをつかむ作用で，その上過去の経験をふくむのである。そして，このような複合性と常に密接不離なものは快，不快，善，悪などのような主体の状況や対象に対する態度とか価値づけのごとききわめて主観的な心理現象，すなわち感情 (feeling) である。他方，感情のうち喜，怒，哀，楽のように突如としてひきおこされた一時的で急激なものが情動 (emotion) と称せられる。感覚と知覚，感情と情動というそれぞれ根底においては深いつながりを有する二つの異った意識作用の段階に対して心理学が普通あたえている説明はこのようなものである。なおこの小論において「知覚」というのは表題として示したように，感覚をもふくめた広い意味であることを断っておく。

§2 さて、われわれの日常言語は心理学で説くところのこうした意識ないしは心理の微差を能うかぎりあらゆる語彙をもちあわせているだろうか。このような問は古来何度となく発せられてきたのはいうまでもない。たとえばベルクソン (Henri Bergson) の答えはこうである：遺憾ながら言語は全社会の感じた印象の共通要素をしか映し出すことができない。いろいろな感覚や観念には個人差がある。にも拘らずすべての人は同一の語で話す。言語はこのような無数の感覚や感情の客観的な、非個人的な相をしか固定しえなかつたのである、と。このような言語観は彼独特の哲学からすれば当然予期されうるものであろう。⁽²⁾ とはいえ、言語機能における個人意識と社会意識との抵触、対立をとりあげることは決して言語を責めることにはならない。言語はベルクソンがいうような精神の形骸化ではない。むしろフンボルト (Wilhelm von Humboldt) が言ったように、「言語がこの対立をどのように融和させるかを、より詳しく考察するならば、いかに異った個性にも道具として役立つべき可能性が言語の最も深い本質の中に横たわっている。言語の要素たる単語は実体のように既製のものを伝達し、またすでに完結した概念を有するものでもなく、ただ自発的な力をもって一定の仕方では概念構成への刺戟をあたえるにすぎない。人間が互に理解するのは……むしろ彼らが相互に彼らの感性的表象や内的な概念生産活動の鎖の同じ環にふれ、彼らの精神的楽器の同じ鍵をたたき、それらが各人のうちに同じではないが相応する概念を造り出すからである」 (Untersucht man nun genauer, wie die Sprache diesen Gegensatz vereinigt, so liegt die Möglichkeit, den verschiedensten Individualitäten zum Organe zu dienen, in dem tiefsten Wesen ihrer Natur. Ihr Element, das Wort... theilt nicht, wie eine Substanz, etwas schon Hervorgebrachtes mit, enthält auch nicht einen schon geschlossenen Begriff, sondern regt bloss an, diesen mit selbstständiger Kraft, nur auf bestimmte Weise, zu bilden. Die Menschen verstehen einander... dadurch, dass sie gegenseitig in

einander dasselbe Glied der Kette ihrer sinnlichen Vorstellungen und inneren Begriffserzeugungen berühren, dieselbe Taste ihres geistigen Instruments anschlagen, worauf alsdann in jedem entsprechender, nicht aber dieselben Begriffe hervorspringen.⁽⁸⁾ 言語のエネルギーとはこういうものなのであろう。個人のいかなる要求にもこたえうるだけの無限の可能性が言語の深奥に存在することは、特にすぐれた言語芸術家の素材操作の方法でしばしば立証されるところである。

§3 さて、知覚や情動はなかならず振巾の大きな実在であるだけに、それらの種々相を表わす諸概念ははたしていかなる経路をたどって——少くとも英語を母国語としている——話し手の意識の中に記号化されるに至ったのであろうか。この小論の目的はそうした語彙の由来を形態と意味の面から探ることにある。ほぼ完璧な域にまで到達したインド・ヨーロッパ比較言語学の進歩によって、語源学の説くところもきわめて信頼度の高いものとなった。とは云え、あらゆる語の起源が解明しつくされたというのでは決してない。未だ以て臆測の域を出ないようなものは意外に多いのである。それ故、以下においては経路不明のものは一切採択せず、各種の結論を比較考量しつつ、もっとも中庸をえたとみなされる線を維持するように努めた。

人間は知覚や認識にのぼるありとあらゆる種類の事象を記号化する手段として言語なるものを有している。今ここで問題の概念は、平易に言って、人間の心の内に展開される現象に関するものだけに、記号化への出発点が他の外界の具体的事物の場合と性質を異にしているのではないだろうか——という素直な疑問がまず先立つ。この間に答えるために、たとえば、「理解する」というような人間の知的作用のうちでも中心的な活動をあらわす語詞の由来を見ることにしよう。英語 *understand* (< 古代英語 *understandan*) では形態的に未だ明白な 'stand under', ドイツ語 *verstehen* (= 古英 *forstandan*) では 'stand before', ギリシア語 *ἐπιστάναι* では 'stand upon', さらにサンスクリット語

ava-gam- では 'come down to' として現れている類似観念はすべて理解作用における対象への接近のあり方をそれぞれ表わしたのものとして大変興味があると思う。⁽⁴⁾ このほかに、ラテン語 *intellegere* 「認識する、理解する」(派生形 *intellectus*, *intellegentia* など) には *inter-*「～の中に」+ *legere* 「拾う、選びだす」という観念がこの語の構成の基点においてはたらいだことも見逃すことができない。これで、結論としてこういうことが言える：現在いかに抽象性の高い意味を担うようになっていく語でさえも、起源的にはきわめて具象的、有形的な表象がその出発点となっているということ。換言すれば、言語は単なる感性的、具体的段階から、情意の世界から出発して偶有的属性を捨象しつつ、そのような事物の核心たる本質的属性の抽象化を高めてゆくということである。

§4 一般的に云うならば、概念の言語的設定は時として予期せざるような観念の連合 (*association*) に基づいているのがわかる場合さえある。言語は一つの構造体系である以上、すべての創造は形態的であろうとも、また意味的であろうとも語の間にある連合に起因すると説いたのはソシュール (*Ferdinand de Saussure*) であった。彼によれば、「任意の語はいかなる場合にも、なんらかの方法でそれに連合することのできるものをみな喚起することができる」(*un mot quelconque peut toujours évoquer tout ce qui est susceptible de lui être associé d'une manière ou d'une autre*)⁽⁵⁾ のである。とはいうものの、ある概念的領域では語が集合して構造的な体系を形成し、その内部では各々の語が互に意味的に他に依存している——相補い合っている、ということが出来る。当面の問題である語彙体系についてもまたそのことはあてはまる。たとえば「快」とか「楽」とかの観念をあらわす英語の一連の語詞は各自意味の微妙なニュアンスや慣用上の制約を保持しつつ、いわば隙間を埋め合っているもので、ここでも厳密な意味での同義性はありません。すなわち形容詞を列挙するだけでも、*pleasant, pleasing, pleased, glad, delightful, delighted, cheerful,*

cheery, cheering, merry, mirthful, gay, jolly, jovial, joyful, joyous, blithe, happy などのように。

現にこうした語群のよって存在する理由は記述的 (descriptive) または共時的 (synchronic) 観点からのみならず, また通時的 (diachronic) 視野からも考察することが可能である。たとえば上例中にもあった blithe (現代では主に詩語で)「喜ばしい」に対する古代英語の名詞 blīps は中世時代に blessen「祝福する」(< 古英 blētsian「犠牲の血をぬる」: blōd「血」とは同系の動詞) という形態的, 意味的な連合作用を蒙って「至福」, 「天上の喜び」という方向に転換したので現代英語の「喜び」を意味する類義語群からは外されるに至ったような場合である。ここにおいて, その提唱者ソシュールの設けた峻別にもかかわらず, 二つの異った観点は混乱を招かざるように, 互に示唆的たりうるように併用されることが望ましいと思われる。⁽⁶⁾

次に章をあらためてとりあげる関係語彙はそのすべてを網羅したものではない。その語源が不明なものを省いたのは勿論のこととして, 上述の諸点がどれ程例証されうるかのテスト・ケースとすべく, 単なる語源の解明にとどまることのないように意図されている。したがって結果的には選択的である。配列の順は二つのセクションに分ち, 第一のものは知覚領域に関する語彙, 第二のものは情動領域に関するものを各々とり扱うことになる。

II

a) TASTE 13世紀におけるこの語〔名詞 tast(e), 動詞 tasten〕の意味は「触れてみる」ということであつた。これが借用されたもとの古代フランス語 taster (> 現代 tâter「ふれる」) の意味, すなわち触感覚の原義が当時まだ失われずにいたからである。触覚から味覚への意味変化がこのように起りうるのは, 発達心理学が説くように, われわれの諸感覚領域相互間には根底的に明確な守備範囲が設定されえないからである。因に日本語の動詞「きく」は主と

して聴覚器官の反応活動を示す語ではあるものの、この他に嗅覚的な「かぐ」、また味覚的な「味わいしらべる」という附随的意味を有することは周知のとおりである。⁽⁷⁾ところで、古代フランス語 *taster* と同様プロヴァンス語 *tastar*、イタリア語 *tastare* などは「ふれる」と「味わう」の二つの意味を有しているために、恐らく(俗)ラテン語の *tangere* 「ふれる」と *gustare* 「味わう」との混成語であろうとされている(たとえば *NED*) けれども、むしろこれは上述のように感覚領域の相通現象を示す好例だと考える方が妥当であろう。⁽⁸⁾したがってこの語の由来はラテン語 *taxare* 「ふれる」の俗語的強意反復形(frequentative)の **taxitare* がさらに縮約されて **tastare* から出たものであって、しかもその上に形態的に *gustare* の連合によるところが多かったと見るべきである。なお中世にこの語が侵入したために、古代から直系の *smakke* 「味わう」は競合に敗れて現代では *smack* 「風味(がある)」に意味を変えてしまっている。

b) BITTER 形態的に古英 *biter*, *bitor* (=古代サクソン語および古代高地独語 *bittar*)、オランダ語および独語 *bitter*、古代ノルド語 *bitr*、ゴート語 *baitrs* などとはすべて「咬む」を意味する動詞 **bitan* の語幹 **bit-* に対して印欧語の派生接尾辞(formant) *-ro-* が附着して形成せられたことになる(例:ゴート語では *bait-r-s* のように。英語 *fai-r*, *weathe-r* にふくまれる *-r* も同じ)。これで明らかなように「咬むような」→「するどい」→「舌をさすような」→「^{から}辛い」への変化は自然であり、もとの具体性がより捨象されているのが分る。

c) CLEAN 古英 *clæne* = 古代フリジア語 *klêne*, *kleine*、古代サクソン語 *kleni*, *kleini* (>オランダ語 *kleen*, *klein* 「小さな」)、古高独 *chleini* (>中世高独 *kleine* 「きれいな; 繊細な, こじんまりした」>現代 *klein* 「小さな」)などの種々の形から西ゲルマン祖語形 **klainiz* を推定することができ、さらにこれは「輝いた(油などで表面が滑らかになって)」⁽⁹⁾を意味する印欧語根 **gel-*

から出たものであろうとされる。⁽⁶⁾他のゲルマン諸語では別の意味——たとえば現代独語の「小さい」はその好例——に転じたものの少ない中で、英語のみは現代までに比較的良好に原義を保ってきたといえる。語根の意味「輝いた」から「きれいな」に至る変化は視覚の領域から知覚判断、あるいは「美」という直観的概念にまで移行したことを示している。なおフランス語の *net* 「きれいな」もラテン語 *nitidus* 「輝いた」から出ていることを附記しておこう。

d) FOUL 古英 *fūl* = 古代フリジア語、同サクソン語、同高独語 *fūl* (オランダ語 *vuil* 「汚れた」、独語 *faul* 「腐敗した、もろい」、古代ノルド語 *fúll*, ゴート語 *fuls* 「悪臭の」など。これらから原始ゲルマン語形 **fūlaz* が求められ、語根 **fu-* (古代ノルド語 *fúinn* 「腐った」、*feyja* 「腐らす」にあらわれる) をふくむ。さらにこれは印欧語根 **pu-* (ラテン語 *pūs* 「膿」、*putere* 「悪臭をはなつ」、*putidus*, *puter*, *putridus* 「臭い」、ギリシア語 *πύον*, *πύος* 「膿」、リトアニア語 *púti* 「腐る」、サンスクリット語 *pūyati* 「くさる、匂う」、アルメニア語 *hu* 「血膿」などとして現れているもの) と対応しているのである。⁽⁶⁾それ故この語は遠く嗅感覚の分野から発して前記の *CLEAN* や、あるいは *fair* の反意語として知覚の世界に至り、且つまた純粋に精神的な意味をもふくむようになったことがわかる。特にこの道徳的、精神的な「汚れ」という意味はすでに古代英語において見られるので、比喩的な転義はいうならば汎時論的 (*panchronistic*) 現象だといえよう (*NED* 'foul' (7)参照)。

e) HEAVY 古英 *hefig* = 古サクソン語 *hebig* (オランダ語 *hevig*)、古高独語 *hebig*、古ノルド語 *hofugr*, *hofigr* などの共通ゲルマン語形 **χabiz* は同じく動詞形 **χabjan* 「持ち上げる」 (= 英 *heave*) より出るものと解せられる (この形はさらにラテン語 *capere* 「つかむ」と対応する)。ある物体を持ち上げる動作とその物の重量感覚とは表裏一体の関係にあることは明白なので、こうした観念連合は「重い」を意味する語には決して稀ではないのである。たとえば、古代英語では使用されていたが中世には上記 *hevy* にとって代られた

swær (精神的に「気が重い」の意もある), オランダ語 *zwaar*, 独語 *schwer* (<古 *suāri*) などのゲルマン系の語はリトアニア語 *sverti* 「目方がある」と対応する。そしてこれはギリシア語 *ἀερίειν* 「持ち上げる」を形作っているところの語根 (s)uer- に帰せられるとされる。⁽¹³⁾ しかれば, ここでも HEAVY の場合と同様の概念が契機となっていることがわかる。

f) SOFT 現代では触感覚に関するある状態をあらわすのが本義であるこの語が, 実は12世紀の古英語では「心地よい, おだやかな」という精神的なものをあらわし, 13世紀に現在の意味に変わった。それ故今まで見たものとは意味変化の方向は全く逆であるといえよう。すなわちこの語を形態的にたどって行くと, 古英 *sēfte* (副詞 *sōfte*: 後期の形容詞はこれの影響で同形となる), 古サクソン語 *sāfti* (副詞 *sāfto*), 古高独語 *semfti* (副詞 *samfto*), 独語 *sanft* などから措定される形は **samfti*。さらにこれは「気に入る」という意味の動詞語幹 **sam-* または **som-* から発するといわれる (>ゴート語 *samjan*)⁽¹⁴⁾。それ故ここでもあらためて感覚と感情の領域の相通性というものを認識することができる。

g) SHARP 古英語 *sc(e)arp* = 古フリジア語 *skarp, skerp*, 古サクソン語 *skarp* (オランダ語 *scherp*), 古高独語 *skarf, scarpf* (>現独 *scharf*), 古ノルド語 *skarpr* など (これより共通語形 **skarpaz*) はすべて「切りさく, 引掻く」の意味をもった古英 *screpan* (>現英 *scrape*), 古高独語 *scurfen* (>現独 *schürfen*) と共通の源から発していることがわかる。とすれば最初物理的なものから発して触覚, 視覚, 聴覚 (#の記号で示される音楽用語さえある) という殆んどすべての感覚領域のみならず, 精神的な面にまでも及んでいるわけである。「切る」という観念から「鋭い」のそれへと変わったものは序いでながら指摘すると, フランス語 *tranchant* (<*trancher* <ラテン語 *truncare* 「切る」), イタリア語 *tagliente* (<*tagliare* <俗ラテン語 *taliare* <*talea* 「切り穂; さし木」) などがある。

h) CALM この英語のもとのフランス語形容詞はイタリア語またはスペイン語の *calma* 「静かさ」という名詞からの借用であり、さらにこれはギリシア語 *καύμα* 「太陽の灼熱」 (< *καίειν* 「燃える」) に由来する。この途中で俗ラテン語が *calma* と *l* の音を挿入した理由については既にあった *calēre* 「熱する」、*calidus* 「熱い」、*caldor*, *calor* 「熱」との類推によるものであることは明らかだ。しかしそれよりもっと重要な意味の連想は「真昼の灼熱」→「その間の休息」→「静寂」ということであろう。現代フランス語の *chômer* 「休業する」の語源が後期ラテン語の **caumare* であることはそのよき傍証となると考えられる。要するに知覚、感情の域をも受けもつようになったこの語の由来は意外なところにあったといつてよい。

i) DULL 現代の形から当然予期される **dyll* は古英語には見当たらないが、それと同系のもので *do!* 「おろかな」がある。古低地独語 *do!*, 古高地独語 *tol* 「気の狂った」、ゴート語 *dwals* (同) などにすでに見られるように、この語は最初精神の状態を指すのに用いられて、そこから感覚に関する意味が派生したように思われる。ただしこれは記録によってのみわかる意味変化であって、根源的にはおそらく何らかの具体的な動作をあらわしたのかもしれない。H.C. Wyld はこの語と *dwel* 「住む」との関係を詳述して、*dwel* は上記ゴート語 *dwals* (その名詞形は *dwaliþa* 「おろかさ」)、古サクソン語 *dwelan* 「まちがう」、古高独語 *twaljan* 「妨げる、おくらせる」とは同系であり、この最後の意味こそ「さまよう」と「住む」との両者を結合する環である、つまり「どちらに行くべきかと遅滞する」ことは「ある場所にとどまる」の意に通じるという⁽⁵⁾。もしこの説が承認できるならば、*dull* の遠源もまた「さまよう」という具体的概念であったといつてよいことができる。

j) CLEAR 中世英語 *clēr* < 古フランス語 *cler* (> 現 *clair*)、スペイン語 *claro*、イタリア語 *chiaro* などはラテン語 *clārus* より発するが、この語は起源的には「よく響く、大きな音の」という意味であったにちがいない。という

のは同じく動詞 *calāre, clāmāre* 「叫ぶ」または名詞 *clāmor* 「叫び声」、さらにギリシア語 *καλεῖν* 「呼ぶ」、古英 *hlāwan* および古高独語 *hlōian* 「吠える」、あるいは古高独語 *gi-hel* 「共鳴する(ラテン語 *con-sonans* に対す)」などのような聴覚印象を表わす語とは同系統だからである。「はっきりした」という視覚印象の意味はここから分れたもので、ここにおいて我々はいわゆる共感覚 (*synaesthesia*) の契機がはたらいていることに気づく筈である。なお独語 *hell* 「澄んだ、明るい」も中世紀にすでに二つの感覚分野を示す用法があったことを記しておかなくてはならない。このような共感的な語義変化が汎時論的意味論の中心課題の一つとして注目せられるようになったのは至当だと思⁽¹⁰⁾う。

III

a) **FEELING** 感情一般をあらわす語としてゲルマン諸語に見られる形はこの英語の他に独語 *gefühl*, オランダ語 *gevoel*, デンマーク語 *følelse* などがあるが、すべてもとは触覚をあらわす動詞「ふれる」からの派生である。西ゲルマン祖語の形 **foljan* はさらに **fōl-* を経て印欧語根の **pōl-* または **pal-* に由来するとされる。この形は古英語や古サクソン語 *folm*, 古高独語 *folma*, ラテン語 *palma*, ギリシア語 *παλάμη* などにも潜在するもので、すべて「手」または「掌」を意味する。結局、「手」→「ふれた感じ」→「感覚；感情」というように、ここでも具体的、生理的な動作が感情の根本になっていることがわかる。

b) **CHEERFUL** この語のもとの名詞で中世時代の形 *chere* は Chaucer ではいろいろな使い方があった。しかし原義はあくまでも「顔」であって、*'in good chere'* といえは「よい顔色をして」ということから「よい気分で、陽気で」ということになり、「気分、外見」の意味をもつに至った。後には単独でも「陽気」という義で使用されるようになった。この場合、「顔」が情動のあ

られる絶好の身体部分であると見るのは洋の東西を問わず大変面白いことである。さてこの語は古フランス語 *chiere* (> 現 *chère*: 'faire bonne chère') という句は文字どおり「よい顔をする」ことから「歓待する, 馳走をする」の意) から出て, さらに後期ラテン語 *cara* にさかのぼる (> スペイン語 *cara*)。ギリシア語 *κάρα* 「頭」と多分関係があると見なされるが, その起源は不明である。

c) **GLAD** 古英の *glæd* には現代的な意味のほかに廃用に帰した「輝かしい, 光った」というのもあった。これこそゲルマン語的な本義であって, 古サクソン語 *glad* にも古ノルド語 *glǫðr* にも「輝かしい」と「喜ばしい」の両義があった。古高独語 *glat* 「滑らかな」の意味は現代の *glatt* までよく保存されている。共通形 **glǫðaz* は古スラヴ語 *gladükü* (> 現代ロシア語 *gladkij*), あるいはラテン語 *glaber*, リトアニア語 *glodas* などすべて「滑らかな」を意味する語と関係づけられる〔印欧語根は **ghlādh-* 「光った; 滑らかな」で, さらに根本的な形 **ghel-* (およびその変形) 「光る」にさかのぼる⁽⁶⁾〕。「輝ける」という視覚的な意味, また「滑らかな」という触覚的な意味から転じて気分の或る状態を指し示すことはさほど困難であるとは思われない。

d) **MERRY** 古英 *myrige* 「楽しい, 喜ばしい」(名詞形 *myrigð* > 現 *mirth*) や中世オランダ語 *merchte* 「陽気」, *mergen* 「楽しむ」は形態的に古高独語の *murgfari* 「長続きしない」の前半に当る形とは同一の源から出たことがわかる。ゲルマン原型 **murgjaz* に帰せられるのである。すなわちゴート語 *gamaurgjan* 「短かくする」にあらわれる。これはさらに印欧語根 **mrghu-* 「短い」に対応することがわかる (> ギリシア語 *βραχύς* およびサンスクリット語 *mərəzu-* 「短い」⁽⁹⁾)。とすれば, 「短い」と「楽しい」との両観念を橋渡しするものは何であろうか。すなわち「時間の経つのが短かく感じられる, 冗長ではない」→「楽しい」ということである。これは時間の知覚が情動に関係してきた珍しい例である。現代独語に *kurzweil* なる語があるが, これも文字どお

り「短・時間」のことから「気晴らし、娯楽」になったわけである。また古ノルド語 *skemta*「楽しませる」も *skammr*「短い」の中性形 *skamt* (>英 *scant*) の動詞化にすぎないのである。

e) **FEAR** 一般にさし迫った危険などの予期から生じるこの情動をあらわす語の中で、その危険（と見做される）対象から転じて主観的な「恐れ」をあらわすように用いられたものが少くない。古英 *fær* は「災難、危険」という意であって、古サクソン語 *vār*「待伏」、古高独語 *fāra*「待伏、危険、欺き」(>現独 *gefahr*「危険」=オランダ語 *gevaar*)、古ノルド語 *fár*「不幸、疫病」などと同様に「懸念」をひき起す対象をあらわす（これらのゲルマン共通形は **færaz*）。さらにこの祖語の形はラテン語 *periculum*「試み、危険、冒険」(>フランス語 *péril* > 英 *peril*)、*experiri*「試す、冒険する」（名詞は *experientia* > 英 *experience*)、あるいはギリシア語 *πειρα*「試み、経験」などに見られる語根 **perēi-*「貫く、経る」（究極のところ前置詞 **per*「～を通して、こえて」の拡大形）とは密接な関係があるのである。そしてこの語が「恐怖」(*alarm, dread*)の意味を有するに至った過程には古英 *āfæran*「恐れさせる」の影響があったといわれる。⁽⁸⁾

f) **WONDER** 古英 *wundor* も上と同様にはじめは「驚き、不思議の対象」を指していたのが、13世紀頃には主体の心情そのものを指すようになった。これについては古英の動詞形 *wundrian* や動名詞形 *wundrung*「驚き」にみられる情動的な用法が直接関与したことは明らかである。古フリジア語 *wunder*、古サクソン語 *wundar*、古高独語 *wuntar* (オランダ語 *wonder*、独語 *wunder*)、古ノルド語 *undr* などはゲルマン諸語に存在する形であるにも拘らず、起源不詳であるとする説も少くない（たとえば *NED* s.v. 'wonder'）。しかし今まで見たこの種の語彙の成立から類推が許されるとすれば、何かもっと具体的な概念がその根底に宿っているのではないだろうか。それで、たとえば H.C. Wyld の説に従うならば、古英語 *wandian*「ひるむ、恐れる」、あるいは *wenden*

「転じる、行く」などにあらわれている語幹部分と同類かもしれないことになりそうである。⁽⁸⁾ただし語末の -r は依然不明であるが。

g) SURPRISE 上述の WONDER が “emotion excited by what surpasses expectation or experience or seems inexplicable, surprise mingled with admiration or curiosity or bewilderment” (COD q.v.) であるならば、今ここに見る語は “emotion excited by the unexpected, astonishment” (*ibid.*) ということ、もちろん心理の微差はあるものの、情動的な実質上の区別は殆んどつけ難いことがわかる。こうした区別を別に立てることなく同一の語で表わす言語も少くない。それに反してこのような同義語の増加は一般に文明語において顕著なことはいうまでもない。フランス語 *surprise* は英語やルーマニア語に入って (*surpriza*)、イタリア語 *sorpresa* などと同様、もとは「驚かせるもの、こと」から発している。それぞれ動詞形 *surprendre*(仏), *sorprendere*(伊)の過去分詞として用いられ、中世ラテン語 *superprehendere* から出る。これはまさに英語 ‘overtake’ と文字どおり同じ構成法であり、もとの概念は具体的な行為にほかならない [比較：英語 ‘take aback’ のような慣用句、あるいはドイツ語 *überraschung* (< *über* + *rasch* 「迅速な」—— もとは軍事用語) などに見られる同様な考え方⁽⁹⁾]

h) ASTONISHMENT 中世英語 (動詞) *astonen* (>この過去分詞 *astoned* から別の *astound* が派生) <古フランス語 *estuner* (>現 *étonner*) <俗ラテン語 **extonare*=*ex*+*tonāre* 「雷が鳴る」という起源のこの語も上と同様「驚き」の気持を与える外界の事象から主体の情動 そのものを示すのに転用された。「雷」にもとずいた同類の語にはラテン語 *attonitus* 「仰天した、呆然たる」、英語 *thunderstruck*、ドイツ語 *verdonnert* などがある。

i) WORRY 古英 *wyrgan* または中英 *wurgen* は「首を絞める、絞殺する」というのがその原義であって、Shakespeare でもまだ “to tear, to pull to pieces” (Schmidt, *Sh-Lex* q.v.) であった。それが精神的な苦痛という比喩

の意味をもつようになったのはずっと後代のことである。現代でも「犬, 猫が咬みついて振り回す」という特殊な使い方が残っていることを知る人は多くない。古フリジア語 *werga* 「殺す」, 古高独語 *wurgan* (> 現 *würgen*) , 中世オランダ語 *worgen* (> 現 *wurgen*) 「窒息させる」などの西ゲルマン共通形は **wur3jan*, さらにこれは隣接のリトアニア語 *veržiu* 「しぼる, 抑えつける」, レット語 *werst* 「曲がる, ねじる」, 古代スラヴ語 *vrěsti* 「しぼる」のごとくバルト・スラヴ語派や, ラテン語 *vergere* 「傾ける, 向ける」, ギリシア語 *ἐργατάειν* 「閉じこめる」などの印欧語派にあらわれている「曲げる, ねじる」の概念をもつ語根 **wer(e)g-* に発すると考えられる [なお H.C. Wyld によれば英語 *wring* 「ねじる」, *wrong* 「悪い(くゆがんだ)」のような鼻音をふくむものもこれの変種であるという。⁶³⁾ ついでに古英の形が正常に発達したならば *werry* または *wirry* となるのであって, 現にそれらは方言に残る]。要するにこの語もまた *physical* から *mental* へと変身をとげたものなのである。

j) GRIEF 中世には「(肉体的な) 苦痛, 傷」という意味を有したこの語はアングロ・ノルマン語 *gref* を経て古仏語 *grief*, またはその動詞 *grever* 「傷つける, 苦しめる」に由来する。最終的な形はラテン語 *gravāre* 「重くする, 圧迫する」で, 形容詞 *gravis* 「重い」から出たものではあるが, すでに前者にも比喩的な精神に関する用法は存在した。すでにふれたように, 意味の比喩的転換は話し手に与えられた遍在的な創造可能性であっていわば個が全体に密接な関連を有する言語の構造体系を扱う記述方法のもっとも把え難しとするものであろう。⁶⁴⁾ なお「重い」という観念から発して「悲しみ」をあらわすものにはスペイン語 *pesar* (<ラテン語 *pēnsāre* 「重さをはかる; 考量する」), セルボ・クロアチア語 *tuga* [=古スラヴ語 *taga* 「心配」< *težuku* 「重い」 (>ロシア語 *tjaželyj*)] などがある。

k) SAD 古英 *sæd* は「満ち足りた; 飽きあきした; うんざりした」という義であって今のような「悲しい」に発展したのは14世紀以降のことである。古

サクソン語 *sad* (オランダ語 *zat*), 古高独語 *sat* (> 現 *satt*), 古ノルド語 *saðr*, ゴート語 *saps* などに対する共通ゲルマン形は **saðaz*, 他方ギリシア語 *ἄδην* 「十分に」, *ἄστος* 「飽くことをしらぬ」, ラテン語 *satis* 「十分に」, *satur* 「満ちたりた」, 古代アイルランド語 *sathech* (同), リトアニア語 *sotùs* 「満足のゆく」などに対する印欧語根は **setós* (実は **se-tós* に分解でき, 後半は過去分詞を構成する派生接辞, 前半は「満つ」の意の語幹) である。⁽⁸⁾ かくて英語の *sad* の歴史は「満足」→「飽和」→「倦怠」→「悲しみ」の線をたどったことがわかる。この種の概念構成に諸多の言語が用いた手続きのうちで *sad* はもっとも特異な出発の仕方をしたといわなくてはならぬ。

1) **LOATH** 現代では述語形容詞としてしか用いられぬこの語は古代 (*lāð*) では「憎むべき, 敵意ある, 不愉快な」という点では現代とは本質上大差はない。⁽⁹⁾ 古フリジア語 *leed*, 古サクソン語 *lēð* (オランダ語 *leed*), 古高独語 *leid* (> 現 *leid* 「悲しみ, 苦痛」), 古ノルド語 *leiðr* などから措定される共通形 **laipaz*。これはまた隣接のロマン語派にも借用されて, フランス語 *laid* 「みにくい, ひどい」 (> イタリア語 *laido* 「みにくい」) となった。ところでゲルマン語派以外にも意味的, 形態的な対応は求められる: ギリシア語 *ἄλειτος* 「罪人」 (< 動詞 *ἄλειεῖν* 「罪をおかす」), アイルランド語 *liuss* (< **lit-tu-s*), さらにトカラ語 (A) *lit-k* 「嫌う」などから語根 **leit-* が定められ, 意味は「嫌う」であると考えられる。こうした愛, 憎のような, いわば, 基本的な情動をあらわす語彙の形態と意味は各語派で連綿と受け継がれてもほとんど不変のままであることは注目しなくてはならぬ。因に「愛」または「欲」を意味する語根 **leubh-* は印欧語族の語派は異っても素人目にもすぐわかるほどによく保存されているのである: ゲルマン語派ではゴート語 *liufs*, 古ノルド語 *ljūfr*, 古英 *leof*, 古高独語 *liub*; スラヴ語派では古スラヴ語 *ljuby*; インド・イラン語派ではサンスクリット語 *lubh-* 「渴望する」; イタリアック語派ではラテン語 *libet* (*lubet*) 「気に入る」 (非人称動詞として), *libido* (*lubido*) 「欲

望」；アルバニア語 *laps* 「欲望」；ギリシア語 *λυπρά* 「情婦」 ('die Geliebte')⁶⁹⁾。

m) HATE 情動の一典型をあらわすこの語の名詞形は古代、中世の *hete* が古ノルド語 *hat-r* か、もしくは対応動詞形 *hatian* (古), *hatien* (中), あるいは別の派生名詞 *haterēden* (<*hate*+*rēden* 'condition') の何れかの影響を受けて語幹部の母音が変わったもの。古サクソン語 *heti*, 古高独語 *haz* (>現 *hass*), ゴート語 *hatis* などから共通語形 **hat-* はさらに印欧語根 **hād-* としてさかのぼりうる (>サンスクリット語 *sādra-* 「苦痛」, ギリシア語 *κᾶδος* 「心配, 悲しみ」, 古アイルランド語 *caiss* 「憎しみ」など)。H.C. Wyld によれば, この語根は「害する, 迫害する」(たとえばサンスクリット語の *kadana-* 「破壊」など) の意の **kād-* と同源ということになるが, こういう関係を考慮する前に, アイルランド語 *cais* が実は今問題の語根の意味を解明する一つの有力な手がかりを与えてくれそうである。というのはこの同じ語は反対の「愛」という意味をも有しているからである。とすれば, 出発点での意味は「あるものに対する気がかり」という中立的なものでなくてはならぬであろう。従ってそこから互に違う方向に別れて出来たのが「愛」と「憎」の観念であったのであろう。⁶⁹⁾

n) ANGER 中世にこの語を英語にもたらしたもとの古ノルド語 *angr* は「苦悩」で, 借入当時の12世紀ではまだ語義も変らなかつた。「怒り」に転じたのは次の世紀であるといわれる。同じ古ノルド語 *ongr*, 古英 *enge*, 古高独 *angi*, *engi* (>現 *eng*), ゴート語 *aggwus* などゲルマン語派ではすべて「狭い」を意味する語とは同源である。さらにラテン語 *angere* 「喉をしめる, 苦しめる」(名詞 *angor*), ギリシア語 *ἄγγεiv* 「首をしめる」(名詞 *ἀγγώνη*), サンスクリット語 *anhas-* 「困窮」などが見られ, 印欧語根は **angh-* 「狭い; 絞める」である。ついでにラテン語の別の派生形 *angustiae* (女性名詞複数) 「窮乏, 苦難」が古フランス語で *anguisse* (> *angoisse*) となり, 13世紀英語に借用されたのが *anguish* である。そしてもう一つのラテン派生形 *anxietas* (<形容

詞 *anxious*) は英語に *anxiety* (*anxious*) をもたらした。少くとも古ノルド語やラテン語に関する限りでは、語義の変化は上述の *WORRY* の場合と全く平行しているといえる。

o) WRATH 「激怒」をあらわすこの語の中世の形は *wraþpe*, さらに古代では *wræþpu* [< 形容詞 *wrāþ* + *þu* (名詞接尾辞) : 語幹の母音変化に注意]。この意味の形容詞として古サクソン語に *wrēð*, 古高独に (*w*)*reid*, 古ノルド語に *reiðr* などが見出されるが、共通語形 **wraip-*, または **wrip-* であり、現英の別語 *writhe* 「ねじる」, *wreath* 「うずまき, 花輪」によって傍証を与えられるように、その原義はきわめて具体的な動作「ねじる」ことであった。「心のねじれ」→「怒り」はいかにも平易な意味変化である。上記 '*anger*' の由来と本質的には酷似した動機をもつことがわかる。なおゲルマン語派において語頭音の *wr-* は「ねじれ, 歪曲」を意味する多くの語に見られる一種の *sound symbolism* であることを注意しておきたい。⁽⁸⁾

p) EAGER 現代では強い欲望をあらわす場合に使用されるこの語も曾って Shakespeare では “It is a nipping and an *eager* air” (*Hamlet*, I, 4, 2) の有名な句に見えるように、或る感覚をあらわす語としてしばしば出くわす。中世の *eger* は古フランス語 *aigre* より借用され、さらにラテン語 *âcrem* (対格形) (< *âcer*) より出たわけであるが、すでにこの古典語においても物理的な「鋭い」のほかに「熱烈な」という比喩的意味もあった。現代フランス語ではもっぱら物理的な状態を指す方に片寄ったのに反して、英語では精神的な方向へと分化したと云える [ラテン語 *acer* は別語 *acidus* 「^{から}辛い, 鋭い」 (> 英 *acid*), *acētum* 「酢」 (< *acēre* の過去分詞中性形), *aciēs* 「先端」, *acūtus* 「鋭い」 (> 英 *acute*), またギリシア語 *ἄκρος* 「先端の」などと同族であり、印欧語根 **āk-* を介して英語 *edge* と対応することを附記しておく]。

q) DESIRE この語は4世紀おくれて17世紀に直接英語に入った *desiderate* と同じく、もとのラテン語 *desiderare* 「あるものを慕う, 熱望する, 不足を感

じる」にさかのぼる (>古フランス語 *désirer*)。Oxford 語源辞典などが明言するのを避けているかのように見えるとおり、この語源は少々意外なところにあると考えられる：英語 *consider* のもとの *considerare* 「考慮する」にふくまれている語幹部分の *sidera* が問題なのである。これは *sidus* 「星」の複数形として「星座」または「天体」の意である。とすれば、まず ‘con-sid-er-are’ は「星(座)に照らしあわせる」が原義となっていたことが明らかとなる。これは恐らくは占星術の用語として登場したものであるらしい。〔比較：*contemplate* < *contemplari* = con + *templum* 「鳥占い観測区域」(+動詞接尾辞)もまた同様の起源〕。それでこの中間項の語によって大体わかることは、接頭語 *de-* は反対の意味をふくむところから「(処置なく)星から目をそらす」→「～であればと残念に思う」という変化の経路をたどって来たのではないかということである。語義が定着するまでの過程は全く恣意的である。特殊化と一般化との交替はこのようにしばしば起りうるのである。英語にはこの語よりもさらに古くから *want*, *wish* などの同義語が存在していたにも拘らず、それが確固たる地歩を占めるに至ったのは、何といたっても古典語の常として、潤色度のより少い意義性にあっただけといえよう。

r) ENVY この語は古フランス語 *envie* を通ってやはりラテン語 *invidia* にさかのぼる。もとの動詞 *invidere* は「横目でにらむ；ねたむ」の意である。接頭語 *in-* は反対的局面などに関して「～にもかかわらず、～にさからって」の用法であって、転義は自明であろう。「羨み」の感情の起因としてこうした視覚的な対象の把握による語詞は他にも少くないといえる。まずリトアニア語 *pavydas* のもとの動詞 *pavydėti* は完了の接頭語 *pa* と *veizdėti* 「見る」(=古スラヴ語 *videti*, ラテン語 *videre*) からの組成であり、古スラヴ語 *zavisti* は *za* 「～のあとを」+ *videti* 「見る」という観念から、あるいはポーランド語 *zazdrość* は *za*+*źrzyć*⁽⁹⁾ 「見る」の合成である。

s) PROUD 中世英語 *prud* < 後期古英 *prūt, prūd* (=古ノルド語 *prúðr*

「勇気のある，堂々とした」は古フランス語 *prūd, prod* (名格形 *pruz* より現代の *preux* 「勇敢なる」) より借用。さらにこれは俗ラテン語 '*prode est*' という形に求められるが，実は古典期の *prōdest* (<不定詞 *prōdesse*) のいわば俗語源的解釈といえる。正しくは *prōd* [= *prō* (-d 音は音便上不要な余剰の子音: 'epenthesis' と称する)] + *esse* 「役に立つ，有益である」という構成。ところで英語での意味変化は「勇ましき」→「自負心のある」のようにごく自然である。名詞形 *pride* は古ノルド語 *prýði* 「勇敢(な行為)」に順じて作られた後期英語の形 *prýde* から発展したものである。その本源はたとえ古典語にあったとしても古ノルド語の形態的，意味的影響は大きかったといえる。

t) **REGRET** 英語に入った中世当時の意味は「人の死を嘆く」であって，古フランス語 *regrater* でもそうであった。英語で *regret* となったのは近代フランス語の影響によって新しく，18世紀まで用いられた形は *regrate* である。これは多分，古ノルド語 *grata* 「泣く，うめく」 [= ゴート語 *gretan* および古英 *gretan* (> 現 *greet*?) 「泣く」] を語幹部分としているようで，それに *repentir, remembrer, recorder* などのように接頭語 *re-* のついた情動，思考に関する多くの語の類推から *regrater* が成立したと考えられる⁽⁸⁸⁾。もしこの説が正しいとするならば，逆説的ながら，この語は今では必ずしも身体的な動作を必要としない純粹に精神的な場合にも適用しうるといつてよからう。

u) **CARE** この語の古代の意味は「悲嘆」であって，「気がかり」という精神的な意味は16世紀以降のもの。古英 *caru* (*cearu*)，古サクソン語 *kara* 「悲しみ」，古高独語 *chara*，ゴート語 *kara* 「嘆き」，古ノルド語 *kor* 「病床」，およびゴート語 *kaürus* 「重い」(別の母音交替から)——これらのゲルマン共通形 **karō-* はさらに「叫ぶ，呼ぶ」の意の印欧語根 **gār-* に連なっている：たとえば，ギリシア語 *γῆρυς* 「声」，ラテン語 *garrire* 「しゃべる」，古アイルランド語 *gair* およびウェールズ語 *gawr* 「叫び」(また別の母音をもつ語根 **ger-* から古英 *ceorran* 「きしる」など)のごとく。ここまで見ると 'care' の遠い出発

点は 'regret' の場合と同様やはり「(悲しみ) 叫ぶ」という行為にあったことが理解されるであろう。

v) **SORRY** 古英 *sárig* (=古サクソン語および古高独語 *sērag*) 「悲痛な」は名詞 *sár* 「(主として肉体的) 苦痛または傷」から転じた形容詞であって、*physical* から *mental* への意味転位はこのような場合、比喩化の作用により意外に容易であると解せられる。ただしこの際忘れてはならないのは古英 *sorg*, *sorh* (> 中世 *sorwe* > 現 *sorrow*) の存在である。全く別の源から出たものの、意味的、形態的の相似のために現代の正書法は、あたかも両者が同一起源であるかのように語幹部分を *sorr-* と綴ったことは注目すべきであると思う。

(1971年 8月 17日)

注：—

- (1) 『感覚と「ことば」——その意味論的考察』[*ALBION* Vol. 14 (1968年, 京都大学英文学会編)], “Synaesthesia as a Poetic Device” (*PSYCHOLOGIA—An International Journal of Psychology in the Orient*, Vol. XV, No. 1, March 1966), あるいは『インド・ヨーロッパ語族における色彩および明暗を表わす語根の比較研究』[『英語英文学論叢』(九州大学) Vol. 13, 1963年]
- (2) *Essais sur les données immédiates de la conscience*⁶ (Paris 1908) p. 126
- (3) *Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts* (Faksimile-Druck nach Original-Ausgabe von 1836: Bonn 1960) S. ccxiii
- (4) Cf. Leonard Bloomfield, *Language* (repr. London 1950) pp. 429-30
- (5) *Cours de linguistique générale*⁴ (Paris 1949) p. 174
- (6) Cf. Stephen Ullmann, *The Principles of Semantics* (repr. London 1967) pp. 145-6
- (7) これによって日本語の二つの動詞 *kiku* と *kagu* (<**kaku*) が単なる母音の交替を示すだけで同一の源から発したのではないかというのが私の推測である。
- (8) Oscar Bloch & Walter von Wartburg, *Dictionnaire étymologique de la langue française* (Paris 1964) s. v. ‘tâter’
- (9) Karl Brugmann, *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen* (Nachdruck: Berlin 1970) S. 346
- (10) “sticky things, such as oil, give a clear surface, or ‘make the face to shine’.
Cf. also the ancient practice of anointing, with its associations” (*NED*, s. v.

- 'clean')
- (11) Julius Pokorny, *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch*, Bd. I (Bern 1959) SS. 366-7
 - (12) J. Pokorny, *op. cit.* SS. 848-9
 - (13) *Ibid.* SS. 1150-51
 - (14) 接尾辞の -t は印欧語のより古い形 -to, すなわち過去分詞を示すもの。英語では swift, bright, right, straight などの最後の子音として残存する。詳しくは K. Brugmann, *KVG*, SS. 317-8, また W. Skeat, *Principles of English Etymology I* (Oxf. 1892) pp. 268-9 を参照。
 - (15) *UED*, s. v. 'dwell'
 - (16) S. Ullmann, *op. cit.* p. 266 ff. また J. Schrijnen, *Handleiding bij de Studie der Vergelijkende Indogermaansche Taalwetenschap* (Deut. Übers: Heidelberg 1921 S. 157 f.
 - (17) さらにこれらも「平らな; ひろげる」を意味する語根 *pelə-* から発するとされる (J. Pokorny, *op. cit.* S. 805 f.)
 - (18) J. Pokorny, *op. cit.* S. 429 ff. 英語 'gold' や 'yellow' はこの語根に求められる。
 - (19) *Ibid.* S. 810
 - (20) *The Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxf. 1966) s. v. 'fear'
 - (21) *UED*, s. v. 'wonder'
 - (22) F. Kluge u. W. Mitzka, *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*²⁰ (Berlin 1967) s. v. 'überraschen'
 - (23) *UED*, s. v. 'worry'
 - (24) Cf. R. A. Waldron, *Sense and Sense Development* (London 1967) pp. 169-170
 - (25) Cf. Pokorny, *op. cit.* S. 876 と Brugmann, *KVG* S. 317
 - (26) 古くはこの語は非人称動詞として 'me is lap' (=it is hateful, unpleasant, to me) のように用いられたが, 'I am loath' と変った。
 - (27) Kluge-Mitzka, *op. cit.* s. v. 'leid' および Pokorny, *op. cit.* S. 672
 - (28) Pokorny, *op. cit.* S. 683
 - (29) Cf. Carl D. Buck, *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages* (Chicago 1965) p. 1111
 - (30) Cf. E. Weekley, *An Etymological Dictionary of Modern English* (N.Y. 1967) Vol. 2 s. v. 'wr-'
 - (31) Cf. C.D. Buck, *op. cit.* p. 1140
 - (32) Bloch-Wartburg, *op. cit.* s. v. 'regretter'
 - (33) Pokorny, *op. cit.* S. 352 S. 383